

重度重複障害児の臥位姿勢での主体的な動きと 座位の安定との関連

藤野正和

(長崎短期大学保育学科)

KEY WORDS : 重度重複障害児、座位の安定、主動感

1. 目的

本研究では、重度重複障害児に対して動作法を適用し、臥位姿勢の中で本児が自らの身体を意識的に動かす主動感が持てる動作を行っていくことが、座位姿勢の安定につながるのかという点について検討を行った。

2. 事例の概要

(1) 対象児：A (男児、9歳)

(2) 所属：X特別支援学校小学部2年生

(3) 診断名：低酸素脳症

(4) インテーク時の様子：全体的に低緊張であるが、所々緊張が見られる。臥位では、肩・胸まわりに緊張が見られる。あぐら座位では、首が不安定であり、体幹部も保持するような力は入ってきにくい。こちらから働きかけに対する反応が少なく、また本児自身が自らの身体を動かそうとする動きも少ない。

(5) 援助期間・形態：援助期間は、X年8月に行われた5泊6日の心理リハビリテーションキャンプの経過について記載した。援助形態は、1回の訓練で50分間援助を行い、1日3回の訓練を実施した。筆者はスーパーヴァイザーとして本児に関わり、合わせて援助者にも指導を行った。

(6) 倫理上の配慮：今回の発表にあたり、本児の保護者に対して、研究の趣旨・個人情報取り扱いについて事前に説明と文書での同意を行った。

3. 事例の経過

1日目：仰臥位での腕上げ課題では上げる方向への援助者の促しに任せて動かす中で、微かな動きを本児の主体的な動きと捉えながらフィードバックし、援助を行った。あぐら座位、膝立ち位の姿勢では、頭部や体幹に力が入らず姿勢を保持することが難しかった。課題が本児に伝わっていないためか、目を閉じてしまうことが多かった。

2日目：主動感をもつ課題として、腕上げ、寝返り課題に取り組んだ。動作の大きな寝返りの動きのほうが本児の表情がよく、課題に気持ちが向いているように感じられた。あぐら座位では、背中への援助量を多くし、腰が反らないように腹部に手を当て姿勢を整えるようにしたことで、まっすぐの姿勢をとることができた。しかし、頭部の動きはまだ感じられなかった。

3日目：寝返り課題は、本児の動きが引き出しやすいことと、どうなれば「できた」なのかを伝わりやすいよう意欲的に取り組むことができた。途中で動きが止まったときに積極的に援助を行っていくの

ではなく、本児の微かな動きから感じられる試行錯誤の過程を見守りながら援助を行った。あぐら座位では側方からの援助でまっすぐの姿勢をとることができるようになってきたが、頭部を前に動かそうとすることが見られ始め、その動きを調整することができなかった。

4日目：寝返りでは援助者の腰に触れながら声を掛ける合図に応じるように、腰をひねる前に頭部を寝返る方向へ動かすことが見られた。途中で動きが止まっても、援助を増やさず声掛けしながら待つと、再度動き出し寝返ることもできた。寝返りでの動きが出てくると、あぐら座位でインテーク時に比べて体幹が崩れることがなく、また、後方から頭部の援助を調整しながら姿勢をとることができるようになった。3回目の途中で発作があり、しばらくボーっとした状態が続いた。

5日目：あぐら座位では身体を起こしたときに重心がしっかりとのった感じで、姿勢も崩れなかった。姿勢を起こしていく声掛けと身体に触れる合図の後に両手に力を入れる動作が見られ、本児の準備と受け止め、援助を行った。また、体幹部に力を入れる動きも見られ、動きとして本人の努力が感じられた。目がしっかりと開き、表情もよく課題に注意が向いているように感じた。

4. 考察

本事例では、環境を整える(腰をひねる)ことで本児の得意な動きを出しやすくし、表現しやすい状況を整えることによって主体的な動きを引き出し、主動感をもてるようにした。寝返りは動きが大きいいため終わりの動作が分かりやすく、「できた」ことを共有しやすかったため、繰り返すことで援助を少なくしても自ら動き出し寝返ろうとすることが増えた。また、寝返りで動きが増えてくると、縦の姿勢でも体幹に力が入るようになり、あぐら座位で援助者の援助を受けながら1、3番をまっすぐに保つことが増え、頭部の援助を減らしても保とうとする動きも感じられるようになった。あぐら姿勢の中でも、自分の身体に気付くことができるようになったのではないかと考える。主体的な動きが増えてくると合わせて、キャンプ中の生活の中でも働きかけに応じるように目を大きくする、笑顔や発声など表出が増えるといった変化が見られ、主動感が外界への気付きにつながったことと考えられる。

(FUJINO Masakasu)